

提携米通信

2017年6月号・黒瀬農舎



田植えがスタートしました。日曜日は一家7人揃って田んぼです。

百姓仕事は、真っ先にお天気と相談です。特に、田起しの時期と、稲刈りは雨が降ると仕事ができず、気が焦ります。

今年も農薬や化学肥料を一切使わない苗は、ほぼ順調に育ち、4月22日に種蒔きしてほぼ1ヶ月育てた苗を5月21日から植え始めました。

田植えスタート日は、丁度日曜日になり3人の子供たちも田んぼです。

そして、毎年この田植えの時期になると、

「田植えは順調」田植え初日は、日曜日。3人の孫も田んぼ。主役は一番下の志穂になりました。 2017.5.21撮影

その子供たちの成長変化に気付きます。

今年の田植えでは、大はしゃぎの主役は、一番下の幼稚園児の志穂になりました。

小学4年生の男児・悠真は、もう田植え機に遊び乗ることはなくなり、苗箱運びなどの手伝いを黙々で行うようになりました。

子供の成長は実に早く、年に一度の田植え毎に、子供たちがあつという間に大きくなったことに今更ながら気づき、そして驚きます。

この日も、夕方まで手伝ってくれる予定でしたが、3時前には小2の花穂が用水路に落ち、全身ずぶ濡れとなり、母親共々戦線離脱で帰ってしまい、当て外れとなりました。

ところで、今年のお米作りで一番心配していたことは、昨年秋以降には、大陸からの渡り鳥が持ち込む鳥インフルエンザが発生し、貴重な鳥類が罹病した動物園の休園や大規模養鶏場の殺処分があちこちで発生したことです。

万一、山形県の鴨農場の親鴨が鳥インフルエンザに罹れば、今年の採卵ができず、我が農舎は、マガモ君が手には入らないこととなります。

春先以降鴨農場と連絡を取り合っていますが、幸運にも無事で、田植えが終わり、数日した6月10日前には、草取りの大きな助っ人として馳せ参じてくれるよう期待しています。

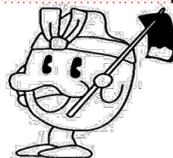
提携米 黒瀬農舎

〒010-0445

秋田県南秋田郡大潟村西1丁目4の7

黒瀬 正・友基

TEL:0185-45-3088 FAX:45-2887



★我が農舎は、電話受付の専任スタッフはおりません。日中は倉庫作業等で留守電受けが多くなりますが、ご了承をお願いします。
★電話は、日祭日や、夜間もOKです。
★お米のご贈答ご利用も宜しくお願致します。

E-mail: akita@kurose.com Web: [提携米 黒瀬農舎](#) 検索

★黒瀬農舎からの返信メールが自動的に迷惑メールフォルダに分類されることがあるようです。返信のメールが届かない場合は迷惑メールフォルダの確認やメールの設定をご確認ください。

★宅配便運賃の値上がりに伴い、複数の運送会社を使うことに致しました。そのため、出荷日/サイズ/お届け先によっては、以前(前回)と運送会社が異なることがあります。ご了承下さい。

エシカルな皆さんに支えられ、今年のお米作りも無事始まりました。



「レベラー作業」レーザー光線付のレベラーで、田面を均一に均す作業。作業機のポールは受光機 2017. 5. 8撮影

我が農舎が農薬や化学肥料を使わないお米作りに転換し始めたのは、今から30年ほど前です。

繰り返され「やっと有機栽培でも経営が継続できるのでは・・・」と見通しできるようになった時期に当たります。

この時代までに有機栽培に参入した生産者は、農業生産にあたって、環境問題や健康など社会性や倫理観・エシカル（Ethical）な理念を持っていた人々がほとんどでした。

その後日本経済の成長に後押しされ、消費者の購その頃はアメリカの科学者レーチェルカーソン女史の「沈黙の春」と、これを受けた有吉佐和子女史の複合汚染に触発された「変わり者」系の先人の方々が、細々と無農薬栽培の試行錯誤を10年余り買行動が高級化、活発化して、農政においても市場ニーズを的確に掴むなど経営マインドの向上が奨励され、有機農産物が消費者ニーズのトレンドして扱われることが多くなってきました。

この影響で、売り上げを伸ばすことだけを動機として有機農業に新規参入する生産者が急増しましたが、彼らは、環境問題などエシカルな理念の追求には、当然、全く興味も関心もない人々が大半でした。



「代（シロ）かき」無農薬栽培成功の大きな秘訣。それは、限りなく平らに代をかき、雑草を防ぐことです。2017. 5. 19 撮影

ところで、この数年私の近隣では有機農産物に取り組む農家が大幅に減ってきてます。

これは、農政がTPP対策で、規模拡大やラジコンヘリやドローンによる農薬散布や農業機械など、コスト低減向けへの補助や融資を手厚くしてきたことが大きな原因です。

環境や身体的安全安心よりも、何が何でも海外農産物との価格縮小が最近の農政です。

これを受けて、今まで有機を行っていた生産者の中で、エシカルな理念を持たない「俄（にわか）有機農家」の多くが、有機から撤退して、農薬化学肥料の多投による増収でコストを抑え、利益を上げるという経営スタイルに後戻り・急転換しているのです。

そして、この有機撤退には、もう一つの背景もあります。それは、有機農産物は、資材や労力の費用が嵩む一方で、収量は多くは望めません。この2つが重なるとKg当たりの生産物コストは驚くほど上がります。

ところが、最近の不況で一般の消費者は価格の高い物は買わない。また、エシカルな生産姿勢のない生産者には、エシカルな消費者の支援は当然望めず、有機栽培のコストに見合った販売が一時に比べて出来難くなって来た。という事情もあるようです。



「田植えは昼食」田植えは、家族7人、昼食も田んぼで賑やか。 2017. 5. 21撮影

このような世情の中で、我が農舎では、農薬や化学肥料を使わないお米作りが今年も無事に続けられているのは、豊かな心で、エシカルなライフスタイルをお持ちの消費者の皆さまのご支援のお陰です。有難いことだと感謝しております。

配送変更！ ★宅配業界の人手不足で運賃や、重量制限など変わります。詳しくは別途チラシでお知らせします。ご理解ご協力をお願いします。★運賃が少し上がります。★30Kgが25Kgまでの制限になります。★お届け時間指定の区分が変わり 12時→14時が14時→16時など一部変わります